

05・恥ずかしい事を全部告白させられて、意地悪あまあま『負けセックス』する

『04・えっちな事ばっか考えてるのがバレて、優しくいじめられて言葉攻め耳舐めされる』からそのまま続き。

とある年の夏。七月二十七日（月）二十二時近く。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十四度程度。

涼しく、心地よい夏の夜。

場所は、民宿内、現在主人公が自室として使っている部屋。

主人公と弥映は今、隣り合って座り、その距離はとても近い。

〈主人公〉

「その……。…………胸も…………」

主人公は、先ほど弥映から『してほしい事を素直に打ち明けていい』と言われた。

だから『胸も触ってほしい』と言いたかったが、最後まで言えず、口ごもってしまったている。

主人公、これではいけないと思う。

こちらから頼んでいるのに、具体的にどうしたらいいか言えていないのは、問題だと思う。

だが、弥映は主人公の言いたい事を察して話してくれる。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく、ゆっくり確認する」

おっばいも弱いのか？

『ひやあ』は感嘆の『ひやあ』

擦（こす）れると『ひやあ』ってなる？

【主人公が可愛くて笑ってしまう】

はは。さっきから何（なん）かもしもじしてたのってそれ？」※

……やっぱりすごく優しいのかもしれない。

実際問題、ずっと優しくしかされていないし……。

〈主人公〉

「……うん……」

主人公、弥映の声があまりにも優しく、思わず甘えてしまいたくなる。自分らしくないと思いつつ、楽をしてしまいたくなる。だが、やはりそれはいけなかった。

次の瞬間、弥映は優しい声のまま、急にひどく意地悪を言ってくる。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※マークまで、ゆっくりと、すごく優しく促す。強制している感じにならないように」

※『甘やかしてもらえろ』と思った聞き手を、ドキッとさせるイメージでお願いします※
いいよ。触ったげるから自分で脱ぎな？

服めくって、ブラもずらして。

『おっぱい触って下さい』ってして?」※

〈主人公〉

「えっ……。あっ……。あっ……」

主人公、あまりの恥ずかしさに、言葉を失う。

そんな主人公に追い打ちをかけるかのように、弥映は続ける。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく促す。強制している感じにならないように」

ほら、脱いで？」※

〈主人公〉

「……。無理……」

弥映、その言葉を受けて、中央に向き直って、主人公の顔を見つめながらささやく。

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく促す。強制している感じにならないように」

無理じゃないよ？ しなさい？」※

〈主人公〉

「……………」

主人公、弥映の要求に顔を熱くし、喉を震わせる。
まだ応じていないのに、羞恥心でおかしくなりそうになる。

……つまり、そういう事だ。

拒否するようなふりをしておいて、もはや自分には『そうする気』しかないのだ。

……やっぱりこの人は、とんでもなく意地悪だ。

でも、私はそれが嫌じゃないし、拒否する気もないのだ。

今、誰かに『ここにいる二人のうち『セックスしたくてたまらない』のは、どちらでしようか?』と聞いたなら、きっと、誰に聞いても絶対に全員が私をさす。

暗い部屋の中でも、自分のこの荒い呼吸を聞けば、誰だってわかる。

なんてみっともないんだろう。

私はこんなに、みっともない人間だったのか。

今負けた。返事をする前から、服を脱ぐ前から、もう結果が決まった。私は完全に負けた。弥映ちゃんじゃなくて自分に負けた。

『どうしても今この人と初体験したい』という欲望に、私の全部が負けたと、もうはっきりわかってしまった。

だって、早くあの手に触ってほしくて、もう他の事が考えられない……。

SE1 主人公が自分で服を脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「素直な感想を述べている。」

主人公位の年代の女性の裸を見るのが、非常に久しぶりなので」
わ……乳首ちっちゃ。

【優しく】

可愛い。

【甘くからかう】

なのにもう勃起してんね」

〈主人公〉

「……………ううう……………」

弥映、再び左耳にささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく」

よくできました。自分で触った事ある？」※

〈主人公〉

「……………うう」

主人公、もはや負けを認めて素直に頷く。

たとえばここで自分が黙っていたところで、弥映は何もしない。

弥映はたとえば『言えないなら、ここでやめてしまおうか？』などと言って、主人公を揺さぶる気さえない。

『そんな事を言わなくても、絶対に主人公はそうする』そう確信しているのだ。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しくからかう。主人公のリアクションから、

『これは、一度や二度じゃなく、自分で触った事があるな』と確信している」
そうだよね。

「ゆっくりと、わざと多めに言ってからかう。実際にはこうは思っていない。

『せいぜい、何回か触った事はあるだろう』程度に考えている」

毎日オナってる変態ちゃんだもんね？」

〈主人公〉

「なっ……♡」

主人公、凶星を指されて声が震える。

せめて隠したかったのに、明らかにそれを認めるような声を出してしまった。

一度負けを認めると、もう全部だめだ。

どんどん気持ちが悪くなる……いやむしろ、自分のダメなところを全部この人に知ってもらいたいという欲望さえ、湧き上がってくる。

弥映、少し驚いて、主人公の顔を見ようと正面に向き直る。

●中央 至近距離

「優しく。内心は少し驚いている」
うん？

「優しくからかう。まさか、本当にそうしているとは思ってもいなかったが、
『別に、そうでもおかしくないよ』という感じで」
適当言っただけだけど。

「少し間をあけてから。優しくからかう」
マジ？」

〈主人公〉

「あうう……」

主人公、優しく弥映に続きを促されて、理性がはじける。
今度は答える義務なんてないのに、素直に頷いてしまった。

これまで自分は、いつも正しいと思う事をして生きてきた。

そんな自分は理性的で、真面目な人間なんだと思っていた。

だけどその前提が、今、半分無事なまま、半分壊れた。

まず、自分はちっとも理性的でも真面目でもない事が、今はつきりとよくわかった。……でも、これが正しい事『じゃない』とは、思っていない。

だからつまり、自分は今間違いを犯しているわけじゃない。少なくとも、これが今『自分が正しいと思う事』なのだ。

セックスがしたくて、この人に自分の心を見てほしくて。

今まで誰にも言えないと思っていた事を、自分から全部バラす。

それが、今自分が一番したい事で、正しい選択なのだ。

しかも自分は、弥映がそれを受け入れてくれると思っている。

今日出会ったばかりなのに、何の根拠もないのに、なぜかそう確信している。

早く全部自分を知ってもらって、弱い所にいっぱい触ってほしいと願っている。

ああ。知らなかった。

自分の意志を持って負けるのが、こんなに気持ちいいなんて知らなかった……。

〈主人公〉

「あ。あ。あ。実は」

●中央 至近距離

「優しく。相槌を打って、続きを促す。主人公が緊張しているのがわかる」
うん」

〈主人公〉

「あの本にあるみたいにつ。いつも自分で触っててっ。
でも全然本みたいになんなくてえ……♡」

●中央 至近距離

「優しく相槌を打って、続きを促す」
うん」

〈主人公〉

「気持ちいい感じはするのに。」

『びくーっ』ていうのが、どれだけ触っても来なくてえし。下、触ってもダメでっ。♡

いつも変な感じのまま寝るしかなくてっ。

それがすごい嫌でえっ……♡」

●中央 至近距離

「長めに間をあけてから。どう返事をしようか、少しだけ考えている。

それから、優しく相槌を打っ

そっか」

涙ながらに訴えると、弥映はとびきり優しい声で応えてくれる。やっぱりこの人はずるい。

これをされると、主人公は全部話してしまいたくなる……。

弥映の顔が近づく。そのまま、額にキスされた。

●中央 至近距離

「優しく額にキスする。泣きじゃくる主人公の緊張を解きたい」

ちゆ。

【すごく優しく。主人公が今言った言葉をまとめる。

『びくーっ』っていうのは、つまり、『イク』事だろうと察する】

毎日触ってたのに、よくわかんなかったんだ。

触ってみて気持ちいい感じはしたけど、いつもイけなくて困ってたんだ？」

〈主人公〉

「はい……」

主人公、もう訳がわからなくなって、ぐずぐず泣きながら頷く。

自慰経験の告白どころか、寝る前にいつも触っている事まで話してしまった……。

だけど主人公は、どんどん口が軽くなる自分を『信じられない』『こんなはずじゃなかった』と思いながら、それが快感になりつつある。

もう、弥映に全部知ってもらって、甘やかしてもらいたいという欲望に、歯止めが利かないのだ。

●中央 至近距離

「ゆっくり、すごく優しくなだめる。」

主人公はおそらく、例の作家の性描写を参考にしたのだろう。

だが、あの作家は詩的な表現を多用するあまり、具体性に欠ける事がある。つまり、オナニー指南書としては不向きだろうと思っている」

そっか。大変だったね。しんどかったでしょ。

【少し間をあけてから。

※マークまでひとときわ優しく、聞き手が

『全部ゆだねて甘えてしまいたい』と思ってしまうような感じで』

大丈夫だよ。ちゃんと教えてあげるから。

どういうのがいくって事なのか、ちゃんと教えたいから。

【『後ろから抱きしめて、乳首いじりをしてあげる』という意味で言っている』
後ろからぎゅってして、してあげる」

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく」

あたしの足の間（あいだ）おいで」※

〈主人公〉

「うん……♡」

SE2 主人公が移動する音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

弥映、主人公を後ろから抱きしめる。

それから、右耳側から顔を出して、右耳に話しかける。

● 右 至近距離

「主人公が、すっかり素直で従順になったので可愛い。

反面『この信頼を裏切れないな』とも思っている」

ふふ。

【少し間をあけてから。※マークまで優しく教えていく】

あのね。おっぱいはこうやっていじるんだよ。

指の腹（はら）を乳首の真ん中にのつけてさ。優しくくるくるするの」※

〈主人公〉

「ああ……っ♡」

●右 至近距離

「とても優しく。主人公の反応がとてみいので嬉しい」
「気持ちいい？ 人差し指より、中指でくるくるが好き？」

〈主人公〉

「うん♥ 気持ちいい……っ♥ 中指すき♥
自分でするのっ♥ ぜんぜんちがうっ♥
……はあ、はあ、はあ。ああっ……っ♥」

●右 至近距離

「とても優しく。主人公の反応がとてみいので嬉しい。
というか、興奮してくる。

この、いかにも他人になかなか心を開かなさそうな主人公が、
自分のする事でこんなに感じて、甘えてくるのが可愛い」

自分で触るのと全然違う？ よかった。

【優しく意地悪を言う。

『これはオナニー指南なのだから、触るところを見ていないとダメだよ』と言う感じで」

あ。ちゃんと触られるとこ見てる？ 目え閉じてちやダメだよ」

〈主人公〉

「あ、あっ♡」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【少し間をあけてから。ゆっくりと】

ほら。どんな風にいじられてるか見て？

乳首さつきより硬くなって、もっと勃起してるでしょ？」※

〈主人公〉

「うう……♡」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【※マークまで、優しく、淡々と、言い聞かせるように意地悪を言う】

あんたの乳首ね。おっぱい出ないから。

今は、気持ちよくなるためだけにあるんだよ？

【少し間をあけてから。『きゅーっ』のところで乳首を軽くつまんでいるイメージ】

こうやって『きゅー♥』ってひねっても」※

〈主人公〉

「あああっ……♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【※マークまで、優しく、淡々と、言い聞かせるように意地悪を言う】

お乳じゃなくて、エロい声出ちやうもんね。

昨日まではオナニー用おっぱいだっただけ。

今日からは、あたしがいじってあげるからね」※

弥映、主人公の耳元でくすくす嬉しそうに笑いながら、主人公の乳首をいじる。

●右 至近距離

☆「【※15秒※ 右耳側でくすくす嬉しそうに笑い、たまに耳にキスする。

主人公の乳首をいじりながら、主人公の反応が可愛くて笑っているイメージ。
意地悪な感じではなく、愛おしそうに笑う。」☆☆

★ ふふ。ふふふふ。ふふふふ……♥ ちゅ♥ ふふふ。ふふふっ……♥ ちゅ。ちゅ♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『そだ』は『そうだ』の略」

そだ。乳首、爪の先っぽでカリカリもしてみよっか。

【少し間をあけてから。カリカリしてから発言しているイメージ】
こんな風に。

【少し間をあけてから。優しくゆっくりと】
カリカリカリって。弱く、優しくね。

【『この子』は乳首の事をさして言っている】
色んなやり方で可愛い可愛いってしたら、この子も喜んで。
もっと敏感になってくれるからね。

【ひととき優しくささやく】
一杯気持ちよくなっているよ」※

〈主人公〉

「あ。あつ。あ。あつ……♡ んううつ……♡」

●右 至近距離

☆「【※15秒※】再び右耳側でくすくす嬉しそうに笑い、たまに耳にキスする。

主人公の乳首をいじりながら、主人公の反応が可愛くて笑っているイメージ。
意地悪な感じではなく、愛おしそうに笑う」☆☆

★ ふふふ。あはっ♡ ふふふふ。ふふふふふ……♡ ちゅ♡ ふふふ。ふふふっ……♡
ちゅ。ちゅ♡

【興奮してくる。ゆっくり三呼吸する】

はあ。はあ……はあ……。

【興奮して、思わず甘いため息をつく】

はあ……。

【甘くからかう】

すっごいこりこりになってんね♡

【『しゅき』は『好き』の意味。主人公が可愛くて、思わず赤ちゃん言葉になる】
乳首、そんなしゅきか。ふふふ♡」

〈主人公〉

「……好き。好き。好きです。もっとして下さいっ……♡」

● 右 至近距離

「少し間をあけてから優しく。少し呼吸が荒くなってくる。

主人公の反応がすごく可愛いので、内心かなり興奮している。

だが、主人公を怖がらせないように、興奮を抑えようとする。『ここ』は乳首の事」
うんうん♥ はあ……はあ。硬くなったここ。

今度はこうやって、指、五本ずつ全部使って包んで、こねこねするから。

「すごく優しくからかう」

ちゃんと気持ちよくなるんだぞ？

「ゆっくり、乳首をこねるのに合わせて言う」

こね、こね。こね、こね♥ こね、こね。こね、こね♥

「ものすごく興奮して。ゆっくり三回呼吸する」

はあ……はあ……はあ……。

「小さく、すごく嬉しそうに笑う」

ふふ……ふふ……ふふ♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく。でも、だんだん気安くなってくる」

もお。ほんとに乳首大好きさんだな。完全に力抜けちゃってるね。

これでイけないの、辛かったでしょ」※

●右 至近距離

「耳にキスする」

ん♡」

弥映、主人公の唇にキスしようと、頭を動かす。
主人公もそれを察して、顔を寄せる。

●中央 至近距離

☆「※10秒※ キスする。わざと音を立てるような、いやらしいキス」☆

★ちゅ……♡ちゅっ。ちゅっ。ちゅばっ♡ちゅばあっ……ちゅ♡

「ものすごく興奮して。ゆっくり二回呼吸する」

はあ……はあ。

「興奮を抑えようと、微笑む」

ふふ」

弥映、主人公を至近距離で見つめたまま話す。
位置は中央のまま。

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「ものすごく優しく。主人公が可愛くて仕方ない」

エロい彼女って良（い）いね。なんでもしてあげたくなる。

「ここから※マークまで、

ゆつくりと、とても言葉攻めしているとは思えないような、優しい口調で。

本当にそうする気かないようなイメージで」

こんなの、毎日徹底的にいじめるしかないじゃん。

これから一杯。暇さえあれば乳首いじりしてあげるね。

だからあんたは一日何回も乳首イキして。

乳首いじめてもらえないと生きていけなくなってもいいんだよ。

ね？」※

〈主人公〉

「……♡」

主人公その言葉に安心してしまって、全て委ねてしまいたくなる。
すると意志に判して、無意識に腰が逃げそうになる。

●中央 至近距離

「優しく。主人公がもぞもぞ動こうとするので」
んー？

【優しくからかう】

ほら腰逃げない♡　くいくいされたいんでしょ？」

〈主人公〉

「あの……♡　お股、がつ……♡」

だけど、それはすぐに捕まえられた。

主人公、目に涙を浮かべながら、弥映を見上げて懇願する。

さっきから、身体の中心が熱くてたまらない。

触る以外の方法で熱いのを何とかしようとすると、どうしても身体がもぞもぞしてしま
うのだ。

それをきつと『腰が逃げる』というのだろう……。

●中央 至近距離

「優しく続きを促す」

んー？」

〈主人公〉

「お股が熱いんです……♡　して？　して下さいっ……♡」

●●右　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「甘くからかう」

お股もぞもぞすんの？

「少し間をあけてから。わざとらしく、なぜそうなるのか、わかっているフリをする」

えー？　なんでだろ。身体（からだ）変になっちゃったの？

「少し間をあけてから。わざとらしく。でも優しく。」

主人公に、どうしてほしいのか、全部言わせようとしている」

あたしさあ。今日があんたと初えっちだからさ。

『して？』だけじゃ、どうしたらいいのかわかんないんだ？

【ゆっくりと、とても言葉攻めしているとは思えないような、優しい口調で】

だから教えて？　あんたの好きなものしてあげたいの。どうして欲しいか教えて？」※

主人公、ここまで言わされるのか。ここまで恥ずかしい事をさせられるのか。と、愕然としながら、それが快感でたまらない。

自分は恥ずかしい事をされたい。

恥ずかしい姿をさらして、弥映にたっぷり甘えたい。

だって、ちゃんとどうしてほしいか言いさえすれば、弥映はきつと全部してくれる。

意地悪だけど優しいのだ。

察して先回りはしてくれない代わりに、主人公が直接お願いした事は、みんな聞いてくれる。

つまりそれは……ただの受け身じゃなくて、この行為に自分から参加しろという事なのだ。

〈主人公〉

「触って、欲しい……♡」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すぐく甘ったるく、優しく尋ねる。主人公が自分から言ったのが嬉しい」

うん♡ どこ触って欲しい？」※

〈主人公〉

「えつとつ……♡」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『すごく甘ったるく尋ねる。『ゆって』は『言って』の意味」

ほらゆって♡ ちゃんと♡」※

主人公、弥映の声が優しくて、うつとりと夢見心地になっていく。

それから、これが自分の本性なのだと理解する。

年齢の割に自立した女性のふりをしながら、本当は甘えたくてたまらない。

普段なら嫌悪する、媚びた甘い声を出して、必死におねだりをして。

それを優しく受け入れられなくてたまらない。いや、受け入れられると信じている。

——それが、自分という人間なのだと。

だけど、こんな事は他の人の前ではできない。

今日出会ったばかりの人なのに、弥映の前でしかできない。

それはつまり『弥映が好きだ』という事なのだと、はつきりわかってしまった。

〈主人公〉

「ぱんつの中手入れて♥ 私の♥ クリトリス♥ 触ってほしいです♥
弥映ちゃんの手で♥ 初めてのクリイキしたいです……♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「嬉しくて笑う。素直にねだる主人公が可愛くてしょうがない」
ふふふふ……♥

「すごく甘ったるく、主人公の言った事を復唱する」

クリいじってほしいの？ いいよ♥
じゃあ脱ぎ脱ぎしないとね♥※

SEE3 弥映が主人公の服を脱がす音

【最初から最後まで流す】

すると、主人公が脱ごうとするまでもなく、弥映の手でパジャマが脱がされていく。
また自分で脱がなくてはならないと思っていたから、主人公はホツとしたような、より
恥ずかしいような気分で、より激しく興奮していく。

さっきは自分の意志で堕ちていくのがたまらなかったのに、今度はされるがままになるのが気持ちいい。

まるで脳に『ちゃんとおねだりできたら、どろどろに濡れて気持ち悪くなった服を、映画の手で脱がしてもらえる』と、刷り込まれていくようだ……。

● 右 至近距離

「少し驚いて。甘くからかう」

うわ。ぐちよぐちよ。着てた服ごとどろどろだ。

【右耳にキスする】

ちゅ

● ● 右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「甘くからかう」

匂いすごいよ？ これ、明日伯母さん達にバレないように洗うの大変だね♥※

〈主人公〉

「うう……♥」

こうして主人公はパジャマのズボンを脱がされ、下半身裸になる。

上半身はブラをずらされて胸をさらしているから、これが、今まで生きてきて一番恥ずかしい格好だ。

こんなもの、できれば誰にも見られたくない。

そう思うような格好なのに、自分はもう例外を作ってしまった。

さらに、その例外に対しては『見てほしい』とすら思っている……。

● 右 至近距離

「すぐく甘ったるく笑う。主人公が可愛くてしょうがない」

くふふふふ ♡

【右耳にキスする】

ちゅ♡」

● ● 右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく」

大丈夫。ちゃんと手伝ってあげるから。

【少し間をあけてから。実感を込めて。本当にすごく嬉しい】

濡れてくれるのって、なんか嬉しいね。

【照れ隠しに、甘くからかう。

『ぐちゅぐちゅんって』は『ぐちゅぐちゅになって』の意味】

ちゃんとぐちゅぐちゅんって、えっちの準備できて、偉いぞ」※

〈主人公〉

「あ、の……♡」

●右 至近距離

【すごく優しく】

んー？」

〈主人公〉

「キスしたい……♡ キスしながらしたい……♡」

その時、弥映が少し驚いたような顔をした。

主人公としては、決しておかしな願望ではないと思ったが、彼女にとっては意外であつたようだ。

だけど、弥映は拒絶しない。甘い声でたずねてくる。

●右 至近距離

「少し驚くが、あくまで甘い声で話し続ける。

そんな『恋人らしい』お願いをされるとは思っていなかった」
キスしたいの？ キス好き？」

〈主人公〉

「うん。好き……♡ 弥映ちゃんとキスしたい♡ ちゅーしながらしたい……♡」

●右 至近距離

「驚きのあまり、少し間をあけてから。
すごく嬉しい。

変わらず甘い声を作って話すが、内心、かなり胸がきゅーんとなっている」
あたしも好き……。うん。いいよ。ちゅーしながらクリいじりしよ♡」

SE4 弥映が主人公の身体を自分の足で固定する音
【最初から最後まで流す】

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく」

こうやって足絡めて。動けないようにしたげるから。思う存分初クリイキしていいよ」

※

弥映、そう言うと、主人公の股間に右手を伸ばし、濡れそぼったそこに直接触れていく。
弥映の手が軽く『そこ』を押しただけで、主人公はびくつと反応してしまった。

〈主人公〉

「……………あっ……………♡」

SE5 弥映が主人公の股間に触れる音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

●右 至近距離

「すごく嬉しい。」

うわ。熱……………♡」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく」

大丈夫だよ。これから沢山気持ちよくなれるからね。

「優しくゆっくりと。クリトリスの皮を、優しくむく」

こうやって。皮から出してあげて。ほら♥」※

〈主人公〉

「…………あああつ…………♥」

●●右 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※マークまでひととき優しく、ゆっくりと」

一杯出てるのとろとろつけて、優しく擦（こす）ってあげようね。

「少し間をあげてから優しく」

大丈夫。めっちゃ勃起してるから。今日はイけるよ。あたしがついてるからね♥」※

SE6 主人公の股間の水音1

「最初から最後まで流す」

【繰り返して流す】

【小さな音量で流す】

弥映、約束通りキスしようと、顔を寄せる。
声が中央に移動する。

●中央 至近距離

「優しく一回だけキスする」

ちゅ♡

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※マークまでひととき優しく、ゆっくりと」

こっちの手繋いで。一杯ちゅーしながら気持ちよくなるうね」※

●中央 至近距離

☆「【※15秒※】キスする。震える主人公の緊張をほぐしてあげるような甘いキス。
軽くて、水気が多い、ちゅぱっとしたキスを繰り返す」☆☆

★ちゅっ。くちゅっ。ちゅ♡ ちゅっ。ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ……ちゅっ♡

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※マークまでキスしながら話す。ひとときわ優しく、ゆっくりと」

気持ちいい？ 今までと違う感じする？

「優しく一回だけキスする」

ちゅ。

大丈夫。痛くしないよ。強くさすったら、クリびっくりしちゃうからね。

「優しく一回だけキスする」

ちゅ。

優しくゆっくりやる」※

〈主人公〉

「……………っ♡」

主人公、弥映に手を握られ、足は絡められて、うっとり快感に溺れる。弥映に触れられている身体の芯がすごく熱くて、他の事は考えられない。汗がしたたり落ちて、目に入りそうなのに、空いている手で拭う気にもならない。ただ、もっと気持ちよくなりたい。もっと擦って、甘い刺激を与えてほしい……。

●中央 至近距離

「興奮して甘い息を漏らす。三回、ゆっくり呼吸する」

はあ……はあ……はあ……はあ……。

【甘くからかう】

ふふ。今度は腰動いてる。やらしー♥ ほんとに処女？」

〈主人公〉

「あ……っ♥」

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※マークまでひととき優しく、ゆっくりと」

大丈夫だよ。エロい恋人って可愛いねって言ったじゃん。

【優しく一回だけキスする】

ちゅ。

【からかっているように優しく】

てか、エロい方が嬉しい。あたしの手で感じてくれるの、幸せだよ」※

〈主人公〉

「……………」
♥
」

主人公、弥映の言葉にすっかり甘えなくなってしまうって、夢中で腰を動かす。弥映に軽く圧迫するようにいじってもらいながら、好きな所を自分から擦り付けに行くのが、たまらなく気持ちいい。

どういう事が『イク』なのかわからないが……。ずっとこれをしていたい位、気持ちいい。

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「さらに興奮して甘く、荒い息を漏らす。

さつきよりも余裕がない。三回、ゆっくり呼吸する」

ふう……………はあ……………はあ。

【※マークまで興奮して、普通に話そうとしてもささやき声っぽくなる。

押し付けてくるのを『もっと強くしてほしい』の意味だと思っている】
どれどれ。もうちよつと強く？ いいよ」※

ここでSE6が止まる。

SE7 主人公の股間の水音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【小さめの音量で流す】

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく一回だけキスする」

ちゅ。

ふふふふ……♡ どうしたら気持ちいいか、わかってきたね。

【優しく確認する。『この強さがいいようだ』と理解している】

この強さですつと擦（こす）る？ ずっとこのままがいい位（くらい）気持ちいい？」

※

〈主人公〉

「このまま♡ このままの強さで、してほしいっ……♡」

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく一回だけキスする」
ちゅ。

【※マークまで興奮して、普通に話そうとしてもささやき声っぽくなる。】
わかったよ。このまましてあげるから、好きな時にイッていいよ」※

●中央 至近距離

☆「【※10秒※】キスする。先ほど同様、主人公に寄り添うような甘いキス。
ただし、今度は舌を絡める。

軽くて、水気の多い、ちゅぱっとしたキスを繰り返す」☆
★れるっ……はむ♥ れるれる……れる♥ ちゅ♥ えれれ♥ ちゅ♥ れるっ♥」

〈主人公〉

「……！ ……弥映ちゃ♥ あの♥ あのあの♥ あの……♥」

そうしているうちに、だんだん変化が訪れてきた。

思わず、背伸びをするように、びくっと背筋が跳ねる。

さすってもらえるのが気持ちいいのに、このままでいたいのに。

何か苦しいような、切ないような……奇妙な感覚がある。

これは、一体何なのだろう。

さつきからこれに襲われるせいで、主人公はさつきよりもさらに、もっと強くさすってほしくて、とにかく身体が熱いのだ。

主人公、荒い呼吸で、助けを求めるように弥映を見上げる。

〈主人公〉

「はーっ♥ はーっ♥ はーっ……♥」

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「すごく優しく。」

『なんか来ちやいそう?』は『いきそうな感じがする?』という意味で言っている』
ふふ。なんか来ちやいそう?

クリ、もっと熱くなってる感じる?

【ひときわ優しく】

もうちよつとでイけるよ。偉いね♥※

●中央 至近距離

☆「※10秒※　キスする。先ほど同様、主人公に寄り添うような甘いキス。
先ほどよりさらに一段階、舌を絡めた濃いキス」☆

★ んむ♥ んっ……れるれる……♥　ちゅ♥　ちゅぱちゅぱ……♥　ちゅ♥　ちゅ♥
ちゅ♥

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「※マークまで、興奮して少し早口になる。

優しくしようとはしているが、少し余裕がない」

いいよ。いつでもイって。

大丈夫。イくところを見せて？　見たい。

大丈夫だよ。大丈夫」※

ここで、SE8のテンポが少し早くなる。

そうか、これが『いきそう』という事なのか。
わからないけど、わかった気がする……。

主人公、そう思いながら、弥映に身をゆだねる。

……自分がよくわからなくても、きっと弥映が助けてくれるだろう。そう思うと、とても安心する。

汗をかいたせいで、いつの間にか自分の匂いと弥映の匂いが混じっていて、それがすごく心地いい。

『どうされているか見ている』と言われたのに、無意識のうちに目を閉じてしまう。でも、きっと弥映は許してくれるだろう。

初めての相手が弥映でよかったと、素直に思った。

〈主人公〉

「……弥映ちゃん……♡ 弥映ちゃん♡」

二人、キスしながら、しっかり身体を絡める。

粘膜と指が触れて、かすかに聞こえる、漏れるような水音と、小さく抑えたような喘ぎ声だけが聞こえる。

●中央 至近距離

☆「【※10秒※】キスする。先ほど同様、主人公に寄り添うような甘いキス。

先ほどよりもさらに一段階、舌を絡めた濃いキス」☆

★ んーんっ♡ ん♡ ふ♡ れろろっ……ん♡ ちゅるっ……ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

【少し苦しそうにキスする】

※主人公がいきそうなのを、聞き手に悟らせるイメージ※

んっ♡ んんう♡ んっ♡」

〈主人公〉

「んんう……！ ふっ♡ ……んーっ♡ んうっ……♡」

●●中央 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「興奮して少し早口になる。優しくしようとはしているが、少し余裕がない。

主人公がもうイク事を理解する」

いいよ。いきな。イツちやえ」※

●中央 至近距離

「キスして再び主人公の唇をふさぐ」

ちゅ。

【苦しそうにキスする】

※さつきよりも一段階苦しそうにして、

主人公がいきそうなのを、聞き手に悟らせるイメージ※
んっ！ んん………♥ ん♥ んーっ………♥

【ここで主人公がいく。

キスしながら、自分もびくっとする】

※聞き手に、ここがピークポイントだとわかりやすく説明するイメージ※
んっ………！」

ここでSE7が止まる。

●中央 至近距離

【一瞬間をあけてから。

荒く、甘い呼吸を六回する。かなり早く、すごく興奮している】

はーっ、はーっ。はーっ、はーっ。はーっ、はーっ………♥

【優しく笑う。主人公を安心させたい。それからキスする】

ふふ………ちゅ♥

できたね♥

【甘くからかう。

先ほどの主人公のセリフを受けて。『びくーっとなる』は『いく』と言う意味】

『びくーっ』てなれたじゃん♥」

〈主人公〉

「……あ。あ。これ、イ。イ……？」

主人公、呆然とした心地で、弥映にもたれかかる。

一瞬、頭が真っ白になるほどの快感が訪れて、全身がびくっと伸びて。

次の瞬間、だらりと弛緩したかと思ったら、さっきの快感が薄く延ばされるように広がってきて……。

今はその快感に、全身がじんわりと包まれているような気分だ。

すぐく気持ちがよくて……なんだか、瞼が重い。目がとろんとする。

動くどころか、瞬きをするだけで、大変な労働のような気がしてくる。

そんな主人公に、弥映は再び主人公の右耳側に頭を戻してささやく。

●●右 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「『これがいくつて事?』と聞いていると理解して。

※マークまで、優しく、丁寧の説明する。

『ぽかぽかになって』は『ぽかぽかになって』の意味】
そうだよ。

これが、いくって事。

一回びくってなった後（あと）、身体（からだ）ふわーってして、ぽかぽかになって、眠たくなる事」※

●右 至近距離

「優しく促す。

この時は『主人公が眠ってしまったら、自分の部屋に戻ろう』と思っている】
このまま寝ちやいな。寝るまで、ずっとなでなでしてるから」

〈主人公〉

「……………うん……………」

主人公、振り向いて、弥映に勧められるまま、正面から弥映にしがみつく。
優しくぎゅっと抱きしめられて、快感も相まって夢見心地だ。

SE8 主人公が弥映に抱きつく音

【最初から最後まで流す】

SE9 弥映が主人公の背中を優しくとんとんする音

【最初から最後まで流す】

【次のセリフと重ねて流す】

●中央 至近距離

「優しく耳にキスする」

ちゅ。

【すごく優しく】

いい子、いい子。初イキできて偉いね♥」

主人公、思う。

……そうか、これが『イク』って事なのか。

弥映ちゃんの言う通り、身体がふわふわして、でも重いような気もして、自由が利かなくて。このまま眠ってしまいたくなるような感覚だ。

……あれ。

そういえば……。

〈主人公〉

「……あの」

●中央 至近距離

「【優しく。内心きよとんとして】

んー？」

〈主人公〉

「……なんか、イ。く時。足が、ぴーんってなったような」

●中央 至近距離

「【声が笑っている。主人公が妙な事を話し出すので。

『『こういう内容の事を伝えたいの？』という感じで】

イく時、足ピンってなった？」

〈主人公〉

「……ような、気がするし」

●中央 至近距離

「相槌を打って、続きを促す」

うん」

〈主人公〉

「ならなかったような気もする……」

●中央 至近距離

「声が笑っている。少し混乱して。

足がピンと『なった』のか『なってない』のかわからないので」
「なんなかった？」

〈主人公〉

「もう覚えてない……」。

なるって聞いてたから、実際どうなのか知りたかったのに……」

●中央 至近距離

「くすくす笑いながら優しく。」

主人公が眠くなっている事を察して、可愛くてたまらない。

眠いから、よくわからない事を言っているのだろうと考える」
どっちよ。

『私は、イツても足はピンと伸びない』という意味で言っている」
あたしなんないんだよね。

『どちらかというと、背中をぐーっとそらしている事が多い』という意味で言っている」
なんかね、背中とかのが、ぐーってなる。

『優しく。』もう寝なさい』と言うように」
だからさ、こういう風になっても変じゃないよ。大丈夫」

弥映、主人公を寝かせようと、主人公の布団までいって、布団をめくる。

SE10 弥映が布団をめくる音

【最初から最後まで流す】

【少しだけ遠くで聞こえる】

距離が少し離れる。

SE11 弥映が布団を『ぽん、ぽん』と叩く音

【最初から最後まで流す】

【少しだけ遠くで聞こえる】

弥映、主人公に布団に入るように促す。

●中央

「優しく促すように」

ほら。おいで。疲れたでしょ。今日は頑張ったね」

主人公は、素直に従って、布団に入る。

確かに疲れた。

身体は温かくて気持ちよく、体調はむしろいい位だが、とにかくけだるい。何もしたくない。

たとえば汗をかいたが、何か飲むのもおつくうだ。

後で水分不足で困るかも知れないが、今はとにかく横になりたい。
そのまま、目を閉じたい。
でも……。

SE12 主人公が布団に入る音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「あの」

●中央

「優しくなだめるような声で」
「んー？」

……確かめて、おかなくてはならない事がある。

〈主人公〉

「絶対いてね？ 朝になっても、いてね？」

……恋人、なんだから。一緒に寝るよね？」

SE13 主人公が弥映の手を握る音

【最初から最後まで流す】

●中央

「内心、とても驚くが、嬉しい。

『まるで本物の恋人のようだ。いや、主人公は本当にそう扱ってくれているのだ』と思う』
あ……」

主人公が手を握ると、弥映が驚いた表情になる。

当たり前だ。

弥映は『恋人になろう』という約束が、セックスが終わった後も続くとは、本気で思っ
てはいなかったのだろう。

相手の言葉を真に受けない。それが、大人らしい対処法なのかもしれない。

だが、主人公にとっては、そうではない。

自分はこれからも……少なくとも、明日も一緒にいるつもりで、弥映にああ言ったのだ。

● 中央

「何と答えるべきか、迷っている。主人公が眠ったら、出ていくつもりだったからである。結果、言葉にならない声だけが出て、少し沈黙が続く」

……っ。

【※マークまで、優しくなだめるような声で。内心、すごく嬉しい】

うん、うん。

わかった。いるよ。

朝になっても、ちゃんとここにいる。ここで寝るし、ここで起きるから」※

〈主人公〉

「……そうだよ？」

恋人同士は、一緒に寝るし。一緒に『おはよう』ってするものなの。

あの本にも、そう書いてあったでしょ？」

その時、弥映が目を細めて笑った。

先ほどの少女のような笑い方とは違う、大人の表情だ。

その顔に、主人公の胸は締め付けられる。

やはり弥映は、自分達の事を、本気で恋人同士だとは思っていなかったのだ。

でも……。

●中央

「ぼそっと。恋人扱いされているのが意外だし、恥ずかしい。でも、嬉しい」

……そうだよね。恋人同士は、一緒に寝るし、一緒に『おはよう』ってするよね。

【照れ笑いして】

なんか今、明日が楽しみかもって思った……。

【心からお礼を言う】

ありがとう。

【額にキスする】

ちゅ

でも、弥映は拒絶しなかった。

主人公の手を握りしめたまま、切なげな表情を浮かべている。

それから……ややあって、優しく微笑んだ。

●中央

「※マークまで、すごく幸せそうに」

いいよ。手、繋いで寝よう。

【少し間をあけてから】

おやすみ。

【少し間をあけてから】

ふふ。

【嬉しくなって、思わず、主人公の匂いをかぐ】

……すんすん。

【主人公の匂いが心地いい】

いい匂い……」※

弥映の顔が、今日何度目かわからない位、すぐそばに近づく。

すると、ふわりと弥映のシャンプーなのか、香水なのか。

とにかくいい匂いがして、主人公は、弥映の方こそ、よっぽどすてきな匂いだと思う。

——数時間前に出会った女性と付き合う事になって、その日のうちにセックスする。

これは、あまりにもフィクションめいた話だ。

いわゆる『陽キャ』の人達にとっては違うのかもしれないが、少なくとも、主人公にとっては、物語の中でしか聞いた事のない話だ。

たとえば主人公が『これは真剣な恋だ』と言っても、誰も信じないだろう。そんな気がしてしまう。

それでも主人公は『自分達は付き合っている』と胸を張りたかった。

それから、今はとにかく、弥映と一緒にいたい。離れてはならないと思った。

なぜなら――……。。

その答えを導き出す前に、主人公は眠りに落ちていく。

ここでフェードアウトして終了。